

正課外活動に対応するポートフォリオ・システムのデザイン

阿濱 志保里^{*1}, 宇田川 暢^{*2}, 川村 和弘^{*1}

^{*1} 山口県立大学高等教育センター, ^{*1} 山口県立大学学術情報センター

Design of Portfolio System Corresponding to Regular Extracurricular Activities

Shihori AHAMA^{*1}, Mitsuru UDAGAWA^{*2}, Kazuhiro KAWAMURA^{*1}

^{*1} Center for the Advancement of Higher Education at Yamaguchi Prefectural University

^{*1} Center for the Academic Information and Technology Services at Yamaguchi Prefectural University

As a qualitative guarantee of learning, portfolio evaluation is utilized in learning situations. In the portfolio evaluation, it is possible to evaluate learning process and outcome in the medium to long term. In addition, by continuously visualizing the learning history of learners' individual learning, it is expected that they will support learners' ability to develop various skills. In this research, we also propose a portfolio system design for learner's regular extracurricular activities and its evaluation method.

キーワード: ポートフォリオ, 正課外活動, 正課活動, eポートフォリオ

1. はじめに

社会をリードする高等教育の質的な充実をめざし、文部科学省中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」において、我が国における目指すべき社会像を「優れた知識やアイデアが積極的活用によって発展するとともに、人と人が支える安定的な成長を期的に成熟社会」とし、明文化した。また近い将来に迫る予想困難な時代における学士課程において、汎用性の高い能力の習得が期待された。以下、期待されている能力を示す。

- ① 答えのない問題に解を見出していくための批判的、合理的な思考等の認知的能力
- ② チームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担う、倫理的、社会的能力
- ③ 総合的かつ持続的な学修経験に基づく創造力と構想力
- ④ 想定外の困難に際して的確な判断ができるための基盤となる教養、知識、経験

このように、学士課程教育は大きな転換期にある。大学は学位プログラムを体系的に設計し、学生は入学時から系統的な教育課程のもとで主体的な学修体験を重ね、質を伴った学修プロセスを経て学位を取得することが求められている。この動向は、大学での授業形態や評価の在り方にも影響を与え、柳らによると、近年では、eポートフォリオを活用した学習プロセス評価の導入やキャリア形成支援など広範囲にわたる。こうした事例は、教育の質を明示的に保証するための具体的成果となり、学習過程における学習者の省察を支援する上で有益な知見であるといえる。

学習活動の「真の成果」を評価する方法の1つとして、ポートフォリオ評価が注目されている。ポートフォリオは従来、芸術家や作家、建築家などの作品等をまとめ、記録するために活用され、個人の資産運用記録などとして経済的にも利用されてきた。21世紀に入り、ポートフォリオは定量的な学習の記録に代わるものとして個人が自分の学びを見つめ、その進捗状況を確認し、振り返るためのエビデンスを共有することを支援する為に用いられてきた。ポートフォリオは、学

習スキル、能力、業績などのエビデンスを集積・管理するための方法を個人に提供する。Stefani,Mason and Peglerによると、ポートフォリオには大きく6つの分類がある。以下に示す。

- (1) アセスメント・ポートフォリオ
- (2) プレゼンテーション・ポートフォリオ
- (3) ラーニング・ポートフォリオ
- (4) PDP (personal development portfolio)
- (5) 共有・ポートフォリオ
- (6) ワーキング・ポートフォリオ

アセスメント・ポートフォリオとは、スタンダードや期待、成果、目的との関係により、その達成具合を評価することを目的としている。プレゼンテーション・ポートフォリオでは、専門性の育成や個人的な学習成果や達成について表明することを目的とする。ラーニング・ポートフォリオでは、学習プロセスにおいて、学習者が文書化したり、学修の振り返り、学習を誘導するための目的である。PDP (personal development portfolio) では、専門性の育成や自己成長、就職活動に関連する。共有・ポートフォリオでは、複数の所有者によって共有することを目的とする。ワーキング・ポートフォリオでは、個人による学習と成長に関する複数タイプのポートフォリオを組合せたものである。実際の実務レベルでは、6つに加え、状況や場面に対応し、多様に組合せて利活用されている。

2. 先行研究

ポートフォリオは日本の学習環境を考慮し、「専門能力育成に着目した定義」、「評価に着目した定義」、「機関の利用やアクレディテーションに着目した定義」及び「就職活動やキャリア開発に着目した定義」に区分している。高等教育では、「学びの質転換」をきっかけに、学習者の学びを可視する目的とし、様々な場面でeポートフォリオが活用されている。

具体的な取組として、名城大学では、学習者の学習成果の把握の充実を図るため、個別授業において、学習者の自らの学習過程と成果を記録するとともに、振り返るために作成した学習ポートフォリオを活用している。

兵庫教育大学では、教員養成課程を対象とし、知の

統合を目的として活用されている。教職大学院では実践的な指導力の強化を図ることを目的とし、実習やフィールドワークなどの実践的な取組が充実しており、学習者は様々な実習がある。そのため、理論と実践とを融合させるため、講義や実習で得た知見を体系的に構築し、振り返りを通じて教員としての知の構成が期待される。そこで、オンタイムで学習者の実習状況や実習で得た知見をポートフォリオに反映し、メンターが随時、確認することができる。また、熊本大学では、遠隔学習を念頭としたLMSとの連携の充実を図った。

日本女子大学では、eポートフォリオの特徴の1つである形成的評価のツールを利用し、明確な人物像を具体的に設定したロールモデルの提示を用いた活用を行っている。具体的には、実施者の能力や経験をよりリアリティを持って示し、なりたい人物像と自分の現在の能力とを比較しながら、必要とされる能力を習得している。

金沢工業大学では、学習者が就学の経過・成果を含めた多様な情報を記録・蓄積することにより、大学生の向上的過程を鑑み、将来への展望につなげるツールとして活用している。また、学習者の学習成果のみならず、1週間単位での行動履歴を記録・蓄積し、長期短期の両側面からの活用を推進している。

これらのように、eポートフォリオの活用によって高等教育機関での学部ごと、学科ごと、コースごとの様々なニーズに対応した学習成果を可視化する組織的試みが行われている。

学生の正課外活動はサービ斯拉ーニングとも深い関わりがある。尾崎・山本によると、学生の正課外活動の教育的効果として、2名の学生を対象としたインタビュー調査から、知的好奇心、多様性理解、情報収集・発見力、試行・判断力の4つであるが、その結果、ジェネリックスキルの獲得には効果が見られた反面、アカデミックスキルの向上を確認することができなかった。桜井は、立命館大学ボランティアセンターにおける地域活性化ボランティアプログラムに参加した学生を対象に調査を行った結果、その成果として、地域社会に参加する意義や方法、仲間との配慮・協力などを挙げている。しかしながら、日本においてサービ斯拉ーニングの考えや教育実践は浸透しているものの、教育的な効果を測定している取組みは限定的である。

その一方、学習者の正課外活動の重要性は大きく、ひいては学生の正課活動の充実につながることが期待される。そこで、本研究では、学生の正課外活動より得られた教育的効果を学習者の学び・成長につついて可視化し、正課活動や学習へ転移させるシステムデザインについて検討を行う。

3. これまでの取組

山口県立大学では、これまで国際的な人材を育成するために、eポートフォリオの作成・運用を行ってきた。グローバル人材を「インターローカル人材(以下、IL人材)」とし、日本の地域と世界の地域をつなげる人材像を設定した。IL人材認定に必要な能力は5つの構成要素からなるACCROSS能力であり、これを身に付けるための活用や経験をポイント化し、可視化を試みた。生涯にわたるキャリア専門教育の出発点に立つ準備ができたことを認定する制度の導入を行なった。

これは、一定のポイントを獲得することで、協定大学への派遣専攻の際に有利となる等の措置があり、150ポイント以上に達すると大学としてIL人材の認定を行う。平成25年度には、本学国際文化学部の旧カリキュラムをもとにIPDポイント制度の対象となる学習活動を定め、平成26年度より運用を開始した。その結果を踏まえて、改善を加えながら、平成27年度から新カリキュラムで対象とすべき学習活動の再抽出および再構成を行なった。個人の利用画面を図1に示す。



図1 個人の使用画面(例)

IPDポイントは、学生の様々な活動内容に対して付与される「Progress Sheet」へ活動内容等を入力した

ものが対象とする。そのためには、プロジェクトを担当する専任教員だけでなく、学生を構成する国際文化学部の教員とその組織的連携を強化し、チューター教員等による学生への動機づけによって、「Progress Sheet」の入力や動機づけ、参加を促すことが重要な導入へのきっかけであった。対応策としては、半期に一度に実施しているオリエンテーションにおいて、入力方法等、注して徹底を図った。その結果、入力率は9割以上に向上することができた。実際に学生が行った活動に対してポイント化し、図式化したものを図2に示す。

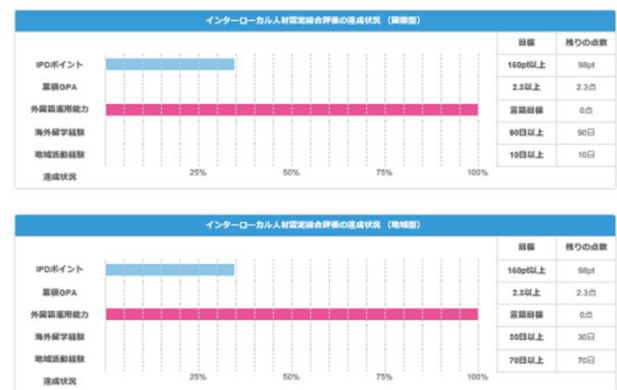


図2 ポイントの表示(例)

学生の授業態度や学内外の活動への姿勢等をインセンティブとしてポイントを与えることで、学生の活動を可視化できた大きな成果であったが、課題も見られた。

運用において抽出された様々な課題を示す。まず1つ目は、学生の活動の多様化に伴い、eポートフォリオに反映されないままになっており、学生の活動に対しての平等な評価に疑問が示された。また、2つ目には、学生の活動に対してポイント化し、その対価として助成金を支給するため、正課外活動の見返りとして金銭的な対価を得ることへの教育的な配慮に疑問が残った。そこで、より学生の目線に立ち、学生が主体的に活動を記録し、蓄積できる環境の構築が急務である。

4. システムデザインの提案

従来の学生の正課外活動は、学生自身が学内外より情報を収集し、自ら選択し、活動等へ参加することが

多い。一部、大学内の掲示板等から提供されている情報（一定の審査や条件をクリアしたもの）はあるものの、学習者の活動記録をすべて把握することは困難である。同様に、活動を通じた学びを可視化することは難しい。これらの問題を解決するため、島根大学では、学生のボランティア活動やサークル活動などの正課以外（単位認定されるものを除く）の活動に対して、ポイント化し、習得したポイントに応じて特典を設けている。活動の証明書をもとに、学務情報システムに活動内容等を反映し、ポイントを取得する仕組みである。インセンティブを与えた正課外活動において、学生の自主的活動の評価と教育効果の向上に大きく貢献している。

本研究では、人的かつシステムのサポートの充実を目指した、eポートフォリオを活用した学びの可視化と正課活動へのつなぎになるシステムを提案する。学生正課外活動では、学習者の正課外活動を可視化するとともに、正課外活動で得られた学びを正課活動へと効果的に繋ぎ、学生を大学全体に支援することを目的とし、特徴とする。提案するeポートフォリオを活用した正課外活動の学びの流れを図3に示す。



図3 学びの流れ

従来の学生の正課外活動は、学生の自主性に依拠してきたため、大学による学生の活動把握は困難であった。そこで、大学教職員の人的なサポートを重視した振り返り・省察を重視したeポートフォリオが効果的であると考える。

また、2つ目の特徴として、正課外活動において得られた知見を正課活動へ学びの転移を促すため、データベースへ統合することで、学習者の学修状況と活動状況とを一元的に照合する。統合データベースのイメージを図4に示す。

特に、学習者が正課外活動における経験や体験をもとに、正課活動の学びへ生かすことが大きな目的であるため、統合を重視したデータベースが最適であると

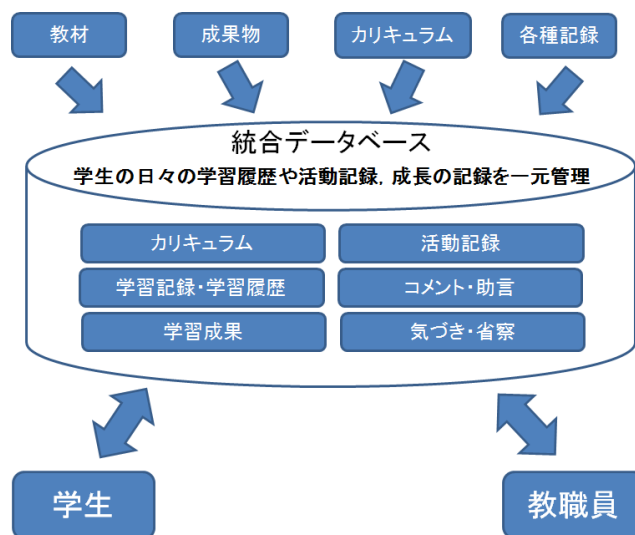


図4 データベースのデザイン

考える。統合データベースには、学習教材やそれらの活動より得られた学習成果、カリキュラム及び各記録などを統合的に取得する。

また、正課外活動の学びを省察するためには、大学教職員などのメンターを生かした、活動のフィードバックが効果的である「人的サポート」の充実である。活動者である学生のみからの目線だけではなく、学生の活動状況を把握している学生支援系の教育スタッフや学習を支援している教員との連携及び情報の共有を行うことで、学習者の学びを充実させ、学びの転移を支えることができる。省察モデルを図5に示す。

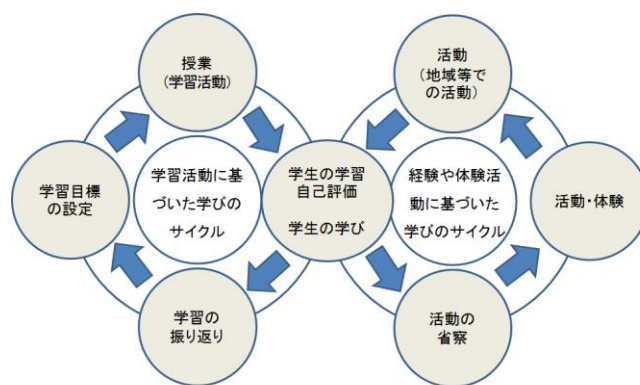


図5 学習者の学びのサイクル

本システムの特徴としては、学習者である学生は活動内容をポートフォリオを用いて活動を可視化し、その学んだ内容を大学関係者（教職員）などと省察を通じて共同・連携で行うものとする。一連の支援は、大

学での在学期間において、一貫した学生の学習である正課活動と正課外活動とをサポートすることと期待される。

5. まとめ

学習の質的保証としてポートフォリオは様々な学習の場面で活用されている。ポートフォリオでは、学習のプロセスや成果を中長期的に評価することが可能であるとされている。また、学習者個人の学びの履歴を継続的に可視化することで、学習者のさまざまな能力の成長を支えることが期待されている。すでに、学習の場面では様々な教育実践が行われているが、学生の正課外活動におけるポートフォリオに関わる研究やその効果については限られている。そこで、本研究では、学習者の正課外活動を正課活動へ学びの転移を目的とした人的サポートとシステムのサポートとの両面の充実を図ったポートフォリオのシステムデザインについても提案する。

今後はハード面だけでなく、質問項目や入力方法などのインターフェイスなどの利用者の利便性やインタラクティブ性に配慮した環境の構築を試験的な実践にもとづき、検討を重ねていく必要がある。それとともに、充実した環境の構築のために、本学の学生の特性や多様化するニーズを把握することも期待される。

参 考 文 献

- (1) 文部科学省: “新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)”, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm (2017年10月30日確認)
- (2) 柳綾香, 小川賀代: “eポートフォリオの蓄積文書を活用したキャリア支援システムの開発”, 日本教育工学会論文誌 35(3), pp.237-245 (2011)
- (3) Stefani, Mason and Pegler: “The Educational Potential of e-Portfolios: Supporting Personal Development and Reflective Learning”, Routledge, 2007
- (4) 森本康彦: “eポートフォリオの理論と実際”, 教育システム情報学会誌 25(2), pp.245-263 (2008)
- (5) 名城大学, <https://yakuportal2.meijo-u.ac.jp/student/login/> (2017年10月30日確認)
- (6) 兵庫教育大学, <https://epo.hyogo-u.ac.jp/> (2017年10月30日確認)
- (7) 熊本大学, <http://el.pharm.kumamoto-u.ac.jp/> (2017年10月30日確認)
- (8) 日本女子大学, “キャリア支援における e ポートフォリオ活用・持続可能なシステムに向けて”, 教育システム情報学会誌, Vol.32, No.1, p.27-36 (2015)
- (9) 金沢工業大学, <http://www.kanazawa-it.ac.jp/kyoiku/portfolio.html> (2017年10月30日確認)
- (10) Rockart, J. F. and Morton, M.S.S.: “Computers and the Learning Process in Higher Education”, McGraw Hill, New York (1975)